

「天におられる主を知る者として」

エペソ人への手紙 6 : 5 - 9

October.12.2025

エペソ人への手紙 6 : 5 - 9 (パウロ)

Preface

久しぶりのエペソ書になります。

これまで、エペソ書 5 : 18 の「ぶどう酒によってはいけません。むしろ、御霊に満たされなさい」という御言葉を具体的にどこで、どう生きるのかということについて見て参りました。

御霊に満たされる人、つまり、キリストを信じ聖霊に満たされることを求めながら生きるキリスト者の信仰が、どのような場面で、どのように営まれて行くのか、最初に教えられた重要な信仰の実践現場が、夫婦関係と親子関係でした。

どちらも、人間社会を営む上で最も基本となる人間関係でありますし、物事すべてがここから始まる土台となる人間関係です。

キリストを信じて聖霊に満たされることを求めながら生きることというのは、何かこう現実離れしたどこか遠くの夢や幻のような話ではなく、最も近く、最も現実に即した、最も近い関係の誰もが問題意識を覚えているだろう家庭家族という場にあって表れる営みであるということを教えられました。

そして、そこからもっと先に広げた人間関係が、今読みました聖書箇所にあります奴隷と主人という社会生活における人間関係です。

2000年前紀元1世紀のローマ帝国下の世界においては、社会を支えるごくありふれたものであった主従関係ですが、その主従関係においても、「キリストのしもべとしての姿、聖霊に満たされた人としての具体的な良いわざが表れてしかるべきだ」と、エペソ書の著者である使徒パウロ先生が、私たちを諭すように教えて下さいます。

もしかしますと、夫婦関係や親子関係以上に、当時の誰もが深刻な問題意識と痛みを覚えながら対峙していた、当時の社会を生きていく上で、避けては通れない人間関係だったとも言えるように思います。

現代に当てはめれば、組織同士の関係や、職場内の上司と部下の関係などに例えられるかもしれません。

もちろん今の社会には、表面上、いわゆる奴隷制度は存在しませんが、事実上の主人と奴隷のような主従関係は、国と国の関係や、様々な組織や機関やグループ内の人間関係の随所に存在しているように思います。

そんな社会を生かされているキリスト者たちに、使徒パウロ先生が聖霊に導かれてお語りになったのは、奴隷制度の改革ではなく、人と人との関係の改善

でした。

制度の変化よりも、人と人との関係の改善こそが、はるかに重要で本質的なことだからです。

私たちが営んでいるこの社会における痛みや苦しみ等の問題は、そのすべてが至るところ、人との関係から生じるものだとも言えるかもしれませんが、その根本的な原因は、人が神との関係を壊してしまったせいだと、人が神から離れ、神を忘れ、神ではないものを神としながら、自らが神のように振る舞おうとしているせいだと、聖書は教えて下さいます。

それゆえに、もし、救い主イエス・キリストによって神との関係を回復させて頂いたのなら、その回復は人との関係にも表れるはずだし、表れるよう努めていくべきだと、使徒パウロ先生はお語りになります。

なぜなら、人の関係回復こそが、神を忘れた世界の最も大きな傷であり、痛みだからです。

もう大分経ってしまいましたが、前回の説教では、エペソ書 6：5－8 の御言葉から、奴隷たちに対して主人との関係改善の勧め、「キリストのしもべとして主なる神様に仕えるように地上の主人に仕えなさい」という御言葉から考えていきました。

そして今朝は、その次、9 節の「主人たちよ。あなたがたも奴隷に対して同じようにしなさい」という勧めの言葉から考えていきたいと思っています。

Part One

いつだったか以前、「他人事ではないなあ」と身の引き締まるような、身の詰まるような思いになったお話を聞いたことがあります。

あるクリスチャンの方が働いている職場に、その方よりもはるかに若く、人生経験の浅い一人の青年が働くために新しく入って来ました。

その青年から見たそのクリスチャン職員の方は、自分のことをどこか見下げているような、冷たいような、ちょっと意地悪さも感じるような姿勢で接してこられたそうです。

そしてある時、ひょんなことから、その青年もクリスチャンであり、しかも、そのクリスチャン職員の方と同じ教会に通っていることを知りました。

お互い同じ教会で信仰生活を送っている者同士だということを、それまで知らなかったわけです。

でも知るようになりますと、その元々おられたクリスチャン職員の方の、新しく入った青年に対する表情や姿勢が突然柔らかく優しくなって、ちょっと気持ち悪く感じてしまうほどに態度ががらりと変わったそうです。

「あ、こりゃまずい！ ブラックな部分の私がバレてしまう！」と思われたのでしょうか。

このお話を伺って、私自身も耳が痛くなり、誰か他の人の話ではなく、自分

自身の話のようにも思えてしまいました。

また、つい先日、こんな話も聞きました。

あるスターの方が、若い時分、自分が所属している芸能事務所の社長からこんなことを言われたそうです。

「私にそんなに丁寧にあいさつする必要はないよ。私じゃなくて、いつも掃除して下さっている方々に丁寧にあいさつして、運転して下さる方にコーヒ一杯差し入れして、あなたの身の回りのことを支えてくれている方々に感謝を表しなさい。これが、あなたにとって一番大事なことだし、すべきことだからね。」

この社長さんが、クリスチャンなのかどうかは分かりませんが、今日の聖書の言葉のようですし、「そうありたいなあ、そうあらねば」と思わされました。

「主人たちよ。あなたがたも奴隷に対して同じようにしなさい」という9節御言葉を思い巡らしていますと、思い浮かんで来た正直な思いがありました。

所謂奴隷制度上の奴隷を所有してはいないけれども、あらゆる場面や人間関係において、「自分が主人でありたい。人を自分の思い通りに動かしたい。私という人間を舐めんよ！」という奴隷を所有する主人のような気持ちが、自分の中にあることを正直に認めざるを得なくなりました。

また、たとい、上下関係の下の方に、主従関係の従の方にいたとしても、「下の立場から上役を突き上げてやろう。なるべくなら、上の立場の人に、私の思う通りに動いてもらいたい」というような、外見は謙遜なふりをして中身は主人のような思いでいようとする気持ちがあることを、恥ずかしくも正直に告白するしかありません。

パウロ先生は「私たちの格闘は血肉に対するものではない」（エペソ6：12）と教えて下さいますが、日頃、私自身どんな戦いをしながら生きているかと言いますと、結局、「自分が上になりたい。マウントを取りたい。自分の言葉や行いに人を従わせたいという血肉の戦いをこそこそ隠れてバレないようにしながら、怒ったり、へこんだり、苛立ったり、気持ちよくなったりしているのではないだろうか」と思わされます。

人によって違うかもしれませんが、私にとって結婚・結婚生活は、自分の本当の姿をまざまざと見せつけられる、見つめる大切な機会となりました。

自分のズルさや、ケチ臭さや、支配欲や、わがままさを認めざるを得なくなりました。

結婚するまでは、自分のことを「いい人」だと思っていました。

「人に意地悪なんかしないし、他の人よりも寛容だと思うし、ケチ臭くもないし、人をいじめたこともなく人と比べたら優しい方だと思う」というような「いい人」勘違いです。

「いい人だから恋愛も出来たし、いい人だから結婚も出来たし、いい人だからいいところにも進めたし、僕はいい人なんだから、いい人の僕の意見を聞いて当然じゃない？」というような根深い深層心理と自信をもって結婚生活に入るわけですが、色んなドロドロとした姿が顔を出すようになりました。

いじめっ子気質はあるし、人をいつでも見下すことを通して自分を上げたいと思っているし、人の話よりも自分の話を聞かせたいと思っているし、従うよりも支配欲の方がはるかに強いし、うわべだけのいい人を演じてきただけに過ぎないことを、大好きで、愛しているはずの私にとって唯一無二の妻や子どもたちを、色んな場面で傷つけてしまっている事実をもって悟らされて来ました。

「ご機嫌取りのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして」と6節でパウロ先生は語りますが、ご機嫌取りのようなうわべだけの仕方ばかりで、結局は、「自分という人を神にしたい」という自分を「いい人」に祀り上げたい欲求に従った人間関係を正当化しようとする巧妙な悪、毒、罪がこの身体に流れていることを認めざるを得ません。

Part Two

なんで今こんな話をしているのかと言いますと、主人と奴隷のような関係に例えられるだろう様々な人間関係においても、同じような意地悪さや毒のような思いでいるということにも気付かされているからです。

まず、自分よりも年下の若い人や後輩や経験の浅い人、つまり、自分よりも下の立場にある人が立派だったり、良いことを話したり、とても上手に物事や仕事をやってのけると、それを素直に受け入れたくない気持ちが作動します。

何かしらいちゃもんをつけて、自分の方がまだ上だということを示したい欲求にかられます。

その人のいいところではなく、マイナスなところに注目しながら「いやいや、まだまだ青いよ！」という未熟さを責めるような気持ちが先んじるばかりか、態度や言葉にも出てしまいます。

または、社会的な立場や組織内の地位において自分の方が下なんだけれども、自分の方が年上の場合になりますと、変に年の功を見せつけたくくなりますし、下から突き上げてやろうという変な支配欲と従いたくないという気持ちが芽生え、反抗的な表情や態度を取ってしまいます。

さらに、これまた厄介なのが、同輩だったり、同い年の友人です。

同じ学校を出、同じ教会で信仰生活を送り、同じ神様を信じているのに、その同い年の友人の方が社会的な認知度やステータスが上だと思えると、変なやつかみが出てきて、「自分の方がやれている、自分の方が頑張っている、自分の方が苦労している」というような露骨なアピールか、または、その友人や同輩を無視するかのような冷ややかな態度や、「こいつは分かっちゃいない」と

というような冷たい視線、さらには、変な余裕感を出そうとする気持ちがふつつつと湧き上がってきます。

色んな場面や関係において、主人と奴隷の関係を作りたいという欲求にかられ、そして、いつでも奴隷を支配する主人の側に立ちたいという気持ちが働いてしまうのが、私たち、神との関係を壊してしまった罪人なんだと思います。

そんな私たちに、聖霊に導かれたパウロ先生が勧めて下さる言葉が、エペソ 6：9 の御言葉です。

主人たちよ。あなたがたも奴隷に対して同じようにしなさい。(パウロ)

つまり、「キリストに従うように、恐れおののいて真心から自分よりも下役だと思われる人を大切にしなさい。ご機嫌取りのような、うわべだけの大切な仕方ではなく、キリストのしもべとして心から神のみこころを行い、人にではなく主を大切にするように喜んで大切にしなさい」ということになるでしょうか。

なぜなら、9 節の後半部分、

あなたがたは、彼らの主でもあり、またあなた方の主が天におられ、主は人を差別なさらないことを知っている (パウロ)

からですね。

私たちキリスト者は、奴隷も主人も無いお方、すべての人間を平等に扱って下さり、権威も力も地位もステータスも経験も無きものと等しくされる、唯一の神、万軍の主、主の主、王の王、平和の君であられる絶対的威光をお持ちのイエス・キリストを信じる者たちです。

比較をもって価値を計る相対的なものではなく、唯一絶対なお方を信じる者たちです。

まことの権威を知る者です。

その権威と義の前にあって罪人でしかないことを、99.9%ではなく、100%認めている者であるはずです。

他の人を責めることなんか出来ない者であることを認めているはずの者たちです。

もし私たちキリスト者が、自分にとって奴隷のようなと言いましょうか、下役のような立場にある人たちに、所謂奴隷のような扱い、考え、姿勢、表情、目線、思いを抱き、言葉を投げかけ、行動を取るならば、私たちは、イエス・キリストなるお方を信じていることを、その瞬間から、その場で否定することになってしまうでしょう。

もし、実際そうしながらも、クリスチャンをやってられるのは、私たちが正しいからではなく、ただ、キリスト・イエスの十字架の赦しと贖いの完全さと

いう永遠の恵みとあわれみといつくしみゆえでしかないでしょう。

私たちの戦いは、キリストゆえに、毎日自分に死ぬことです。

Part Three

使徒パウロ先生も第一コリントでこう仰っています。

コリント人への手紙第一 15 : 31 (パウロ)

私たちの主キリスト・イエスにあって、私が抱いている誇りにかけて言いますが、私は日々死んでいるのです。

コリント人への手紙第一 4 : 10 - 14、16 (パウロ)

「私に倣う者となって下さい。キリスト・イエスにあって抱いている誇りにかけて毎日自分に死に、ののしられては祝福し、中傷されては優しい言葉をかけながら、この世の屑、かすとなっている私に倣う者となって下さい」と、パウロ先生は私たちに真摯に語り掛けて下さっています。

これが、私たちキリスト者の生きる道です。

イエス様の仰る狭く、細い道です。

イエス様ご自身が進まれ、身をもって教えて下さった道。

ご自分を空しくし、自らを低くし、人が顔を背け、蔑むほどに見るべき姿もなく、輝きもないところまで、十字架の死にまで従い、人を、私たち人間一人一人をご自分よりもすぐれた者と思うだけでなく、実際に行動に起こして下さったイエス様に従いたいと、倣いたいと、生きたいと生きているのが、私たちクリスチャンです。

『イエス様信じたら、あれも叶い、これも叶い、こんな風に上手くいき、あんなものも与えられ、こんなに気持ちよく』というようにいつまでもお乳ばかりを求める幼い子ども服を着た変な姿のへんちくりんな大人のようなところから、もういい加減、固い食物を食べる喜び、味わいに入るように。信仰の奥深いところへと進むように。その長さ、広さ、高さ、深さがどれほどなのかを理解する力を持つように」と、聖霊に満たされたパウロ先生から優しく諭されているように感じます。

そして、その歩みをともにして下さるお方が、神、イエス・キリストです。

Conclusion

世は、人は、「世の中を変えようじゃないか」と、「世の中が変われば何かが変わるし、世の中が変われば、良い方へと進む」と言います。

もちろん、その主張の全部が、間違っていないかもしれません。

でも、聖書は、そこからは始めません。

聖書は、「先に世を変えろ」とは言いません。

先に、「救いを受けなさい。新しく生まれなさい。聖霊に満たされて、互いに仕え合いなさい」と言います。

そうしてこそ、新しく生まれた人の、新しい関係を通して、世の中が変わるからです。

キリストにあって新しく生まれた人の新しい関係を通して、世の中が変わるからです。

でも、世の中は逆を行こうとします。

「周りが変われば、社会が変われば、地位や立場が変われば、自分に備わっている条件や状況が変われば、良くなる」と言います。

要するに、「私は変わらない。変わってたまるか」ということでしょうか。

「私は正しい」と信じているがために、「世の中から先に変える」と考えるのだと思います。

でも、聖書は反対です。

主イエスにあって新しく生まれた人たち、真にキリスト者となった人たちは、全くもって新しく生まれたその生き方を通して、最も近くの人たちとの関係を変えていく、作っていく。

「夫や妻、親や子、社会における自分と近い色んな関係を、主にあって新しく生まれた者として自ら先に変えていくことが、物事の本質を変えることである」と教えて下さいます。

私たちは、天におられる主なる神を知る者です。

その權威を知る者です。

その權威の前にあって、安心して死ねる者たちです。

まことの權威なるお方を知る者として、喜んで、自ら進んで他者との関係を変えていくことが出来る者たちです。

どうか、使徒パウロ先生や主イエス様に倣う生き方をする者でありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：私はこの世の屑、かすになりました。ですから、あなたがたに勧めます。私に倣う者となって下さい。